

硝子体手術を志して30年

東京医科大学茨城医療センター 眼科教授 岩崎 琢也
専門分野 網膜硝子体疾患、硝子体手術、白内障手術



硝子体手術とは強膜(白目)に小さい穴を開け、眼球の中(硝子体腔)に生じた出血、増殖膜、網膜剥離といった様々な病態を眼の内側から治療する術式です。

硝子体手術は1971年に米国、マイアミ大学のロバート・マカマー教授がVISCと名付けた硝子体手術装置を世界に先駆けて開発し、臨床応用に成功したことに始まります。

当時の術創は16G(径2.2mm)でしたが、1980年代に入ると灌流、吸引、照明を三つに分けた20G(径0.9mm)3ポートシステムが開発されました。

私が硝子体手術の道を志したのはその頃であり、東京医科大学眼科学教室に入局して4年目の時でした。当時、眼科教室の助教授であった白井正彦先生(現:東京医科大学理事長)にマカマー教授らが主催するエジプトの国際硝子体

学会への出席を命じられたのです。自分にとって初めての海外渡航であり、ナイル川を豪華客船でクルーズしながら船内で開催された国際学会は非常に刺激的な経験でした。日本からは招待演者として後に大阪大学教授と東邦大学教授にそれぞれ就任された故・田野保雄先生と私の恩師、竹内忍先生が30代の若さで参加しました。それから30年の月日が流れ去った21世紀の今、硝子体手術は25G(径0.5mm)から27G(径0.4mm)システムまで進化しました。縫合を要しない極小切開手術は硝子体手術をより低侵襲で安全なものにしました。しかしながら、硝子体手術が依然として高度な手作業であることは昔と何ら変わりようがありません。高田眼科が15周年を迎えるにあたって、これからも質の高い日帰り硝子体手術を多くの患者様に提供していく所存です。



30年前のエジプト国際学会の終着港、アレキサンドリアでのスナップ
左から竹内 忍先生、当時、28歳だった私、一人おいて故・田野保雄先生

